資料　アリソン・ウィックス（Alison Wicks）講義録

「私にぴったり：作業科学がいかに見方を変えたか」

吉川ひろみ

県立広島大学保健福祉学部

2007 年 12 月 6 日には県立広島大学，翌 7 日に聖隷クリストファー大学で，アリソン・ウィックス氏（オーストララジアン作業科学センター長）が，「It's in my blood : How occupational science changed my world view」と題した特別講義を行った。12 月初旬に倉敷市で開催された第 11 回作業科学セミナーの特別講演のための来日に合わせて，学生のための講義も企画した。私がウィックス氏に初めて会ったのは，2006 年 7 月に開催された第 1 回作業科学シンクタンクに参加したときだった。細身で姿勢がよく大きな目がきらきらと輝いていた。しかし，最大の魅力は彼女の言葉の端々から伝わる「作業の視点を広めよう」とする熱意である。本稿では，講義内容と学生の反応を紹介したい。

講義要旨

今日の私の話が，作業科学と作業療法の関係を理解する助けになれば幸いです。この講義では３つの質問に答えるよう依頼されました。①作業科学が私をどのように変えたか，②作業科学と作業療法の潜在力（potential）をどう思うか，③作業療法士として，作業科学者としての私の夢は何か。私の見方は，私の仕事と学習の経験から形作られたものなので，まず私自身についてお話します。私の家はショーヘブン市あります。シドニーから 180km 離れた美しい所です。以前は農業が盛んでしたが，今は観光業が盛んです。ここに 25 年間住んでいます。川に面した自然豊かな環境で，裏庭にはカンガルー，ワライカワセミ，ウォンバットがやって来ます。私はウーロンゴン大学のショーヘブンキャンパスで，仕事をしています。2000 年に設立されたキャンパスで，350 名の学生がいます。医学を学ぶ大学院は 2007 年に開設され，学生は 20 名，2008 年には看護学科も開設されます。ウーロンゴン大学に OT 学科はありません。私以外には作業科学者もいません。2005 年に私は，ここの作業科学センターの所長となりました。これは名誉職で無給です。2007 年 7 月には，作業科学の非常勤講師となりました。

1971 年，高校生の頃には教育と看護に興味がありました。進路選択の時間に作業療法（OT）について聞いた時，私に向いているなと思いました。教師と看護師の中間のように思えたのです。私は OT 学科に入学し，OT が好きになりました。3 年後に資格を取りました（当時は大学に OT 学科はありませんでした）。1970 年代の OT 教育は活動分析，機能評価，ADL 評価に焦点が当てられていました。手工芸も習い，作業療法実践にこのような活動を取り入れました。テーブル，本立て，陶芸，鍋つかみ，マットなどを作りました。卒業の年に結婚し，1975 年には夫と共にワーキングホリデーを使い，ニュージーランドで過ごしました。作業療法士としての最初に仕事をしたのは総合病院でした。病院でのリハビリテーションや，地域センターでの高齢者デイケアで仕事をしました。ニュージーランドで 18 か月暮らした後，クィーンズランドのブンダバーグで，小さな病院のたった一人の作業療法士として働きました。1977 年にはシドニーに戻り，障害児のための病院で学生の指導もしました。学生たちとグループプロジェクトをしました。1978 年には，夫が理学療法学科の学生となり，最初の子どもが生まれました。その後の 20 年間，私の主な作業は母親業で，パートで作業療法の仕事をいろいろしました。1982 年に夫が卒業し，私たちはショーヘブンに引越し，理学療法のビジネスを始めました。私はこのビジネスのマネージャーとなり，今も続けています。子どもは二人になりました。1982 年から 85 年まで，大学卒業資格を取るための勉強をし，子どもが三人になりました。10 年間は，小さな作業療法の事業所もしていました。出産と子育てのためのプログラムや，職業リハビリテーションの相談事業を行いました。1987 年には 4 番目の子どもが生まれました。

1993 年には，子どもたち全員が学校へ行き，プライマリヘルスケアの仕事で「オタワ憲章」を知り，修士課程で学びました。作業科学を学び，アン・ウィルコックに出会ったのです。作業科学の教材を読み，考え始め，そして気づいたのです。何かが足りない－それは，私の実践を導く理論枠組みとクリニカルリーズニ

ングでした。アン・ウィルコックは私の師となり，私は門下生になり，彼女が始めた仕事を続けました。修士号を取ったことは，学習と研究を続けたいという気持ちに拍車をかけました。そして，10 年後－50 歳になるまでに，博士号を取ると決めました。

修士課程を修了した 1997 年には，栄養士，足治療の専門家（podiatrist），医師と共に，住民のための糖尿病管理プログラムに関わっていました。夫も大学院に行くことになり，私は自分の博士号は棚上げにしました。それでも専門職として活発に学会で発表しました。1999 年にはアン・ウィルコック主導の下で，国際作業科学者協会（International Society of Occupational Scientists: ISOS），世界作業療法連盟（World Federation of Occupational Therapists: WFOT）の作業科学のための国際諮問会議を設立しました。2000 年には博士課程の学生となり，3 年後に修了しました。博士号を得たのは 50 歳の誕生日の 2 週間前でした。目標達成です。お祝いのパーティを開きました。

さて，次に何をするか決めなければなりません。何をしたいのか，どこで，誰と一緒に，と自問自答しました。2004 年 6 月に，遂に答えが出ました。私は健康に対する作業の見方を広めたい，作業科学を世の中の主流（mainstream）にしたい。ショーヘブンで，この地域と共に仕事をしていきたい。2005 年に，私はショーヘブンキャンパスに，オーストララジアン（オーストラリアとニュージーランドの意）作業科学センターを設立しました。詳しくはホームページ http://shoalhaven.uow.edu.au/aosc/を見てください。

さあ，最初の質問に戻りましょう。作業科学がどのように私を変えたか，1993 年に作業科学に出会ってから，私の人生に３つの大きな変化がありました。まず，作業のレンズで世界を見るようになりました。それは常に作業科学者でいるということです。

ウィックス氏が持参したメガネ（作業のレンズ）

テレビのニュースから，作業的不公正を知り，映画を観たり本を読んだりしながら，登場人物の人生が社会的，政治的，地理的，経済的，文化的にどのように影響されているかを考えます。作業ニーズと作業興味をもつ作業的存在として人々を見るようになりました。私は常にこの眼鏡をかけているのです。二つ目の変化は，作業療法士として，効果的に人々のする必要のあることや，したいことを，できるようにすることができると信じられるようになりました。最後に，私自身を作業的存在として理解するようになりました。自分が何をする必要があるのかが，わかるようになりました。健康に対する作業の見方を広め，作業科学を主流とすることが，私の行う必要のあること，私の使命なのです。

次の質問は，作業科学の潜在力は何か，です。作業科学の潜在力は広大だと思います。作業科学はまだ 20 歳の若い学問ですが，作業の知識と理解を深め，発展する可能性は拡大していくと信じています。作業科学の潜在力について 3 点述べます。まず作業科学は，複合的な学問となる力があります。作業科学は作業療法士が誕生させたけれど，他分野からの貢献があります。今はまだ作業療法士が中心ですが，共同研究もありますし，作業科学の考えや概念はさらに発展し，躍進するでしょう。次に，作業科学には主流となる力があります。一般の人々の考えに影響を与え，主要な科学として受け入れられるでしょう。作業科学が主流となれば，政策にも影響を与え，政治の様々なレベルで，実践にも影響を与えることになります。作業療法の潜在力も広大です。作業療法士となる皆さんの将来も前途洋洋です。作業療法の潜在力は，作業科学の出現で強化されました。作業科学は，適切な後ろ盾を作業療法に与えたのです。健康に対する作業の見方を広めることを通して，作業療法は次のような潜在力をもつことになります。まず，人々の背景，身体的，認知的，情緒的困難にかかわらず，人々がしたいことをできるようにすること。次に，健康のホリスティックな概念を通して，21 世紀のライフスタイルの問題を強調すること。最後に，作業療法は健康的な地域で健康的な生活に貢献する潜在力をもっているのです。不幸なことに現在は，作業療法の潜在力は制限されているように思います。人々からは，作業療法が狭く見られているのです。作業療法の潜在力を知りましょう。殻を破り，新境地を開拓し，事業を起こし，市場を開拓し宣伝するのです。

最後の質問は，私の夢は何か，です。夢の中では理

想世界にいることができるので，私は夢を見るのが大好きです。作業科学が主流となることを夢見ています。作業科学が世界中に知れ渡り，尊重され，多くの学者が参加する学問となるのです。世界保健機関（WHO）が作業の見方を採用するというのも私の夢です。健康に対する作業の見方は，病気の原因を探るよりも，何が人々の健康を維持するかを考えます。WHO がこの見方を採用すれば，国の政府もそう考えるようになるでしょう。人々が「作業 occupation」という言葉を，私たちが毎日行うことや，する必要があることだと理解するようになることも私の夢です。人々が自分自身を，意味のある作業をしっかり行う必要がある作業的存在として理解するようになることも私の夢です。作業療法が作業を基盤とするようになることも私の夢です。そうなれば作業療法士は，まず最初に人々が自分の好む作業をしっかり行えるようにと関心を向け，作業機能障害の原因を考えることは二の次にするようになります。作業療法士が健康な人々のために仕事をする，というのも私の夢です。そのために作業療法は，病院ではなく地域で行われる必要があります。私の最後の夢は，世界中で作業的公正が実現することです。全ての人々が意味ある作業をしっかり行う機会がある，そういう作業を選択できるということです。

今日の講演の準備で，私に投げかけられた質問を考え，自分の作業歴とその影響を振り返りました。作業療法士として，また作業科学者として，いくつかの重要な決断と，私の人生への影響をうれしく思います。最後に，この振り返りを要約してみます。①学習は人生のためのもので，成長と発達の鍵となります。②柔軟性が必要ー家庭と仕事の両立には特にこれが必要です。③チャンスは逃すなー今までと違うことにトライするのを恐れないことです。④有言実行です。⑤自分のすることを信じることですー作業の力を心底信じ，健康や地域開発における作業の役割を信じるなら，情熱を持って，自分の目標の達成のために努力することができるでしょう。

1970 年代の初めに，作業療法学生として木工をしました。今は，意味ある作業として木工を選んでいます。私の学問中心の生活を，バランスよくするための作業として木工をしています。「Mens Shed（おやじさんたちの物置小屋）」というプログラムで毎週木工をしています。

講義後の学生の感想では，作業療法士，作業科学者としてのウィックス氏と同様に，結婚，子育て，仕事，勉強をする女性としての生き方に対する共感や憧れがあった。また，ウィックス氏が作業科学との出会いを「虫にかまれて作業科学に感染した（Bitten’ by the bug, Infected’ by occupational science）」と表現したことを引いて，「自分もすでに感染していた」と語る学生もいた。映画や小説を例に出し，作業の見方を持っている登場人物と持っていない登場人物を区別する学生もいた。学生たちは，作業療法学科もない大学で，作業科学を知る人がいない大学で，活動を展開するウィックス氏のパワーに敬服しつつ，広く豊かな自然の地でのびのびと楽しく暮らす様子に心和む様子だった。

ウィックス氏と学生

その後もオーストララジアン作業科学センターはさまざまなプロジェクトを企画し実行している。2008 年夏には日豪奨学金制度に応募しないかというウィックス氏の提案を受けて，高木雅之氏（県立広島大学）が，エンデバー・エグゼクティブ奨学金を獲得した。高木氏は 2009 年 8 月から 4 か月間ウィックス氏と共にプロジェクトに参加している。

高木氏と Mens Shed のメンバー